寒紅梅

高瀬高校の同窓会長・宮﨑史郎さんに、二月八日（木）にお会いしたら、開口一番、嬉しい話を聞かせてくれた。

「今年の歌会始に入選した岩倉由枝さん、高瀬高校の卒業生、二ノ宮出身なんや。会が終わったら、新聞記事など一式をコピーしてお渡しするきに」

家へ帰って直ぐに、頂いた封筒を開いた。何とコピーが八枚もある。ぺらぺらっと、先ず八枚を全部見た。そして元へ戻して一枚目から順に読み始めた。岩倉由枝さん直筆の短冊の表と裏であろうか。それを左に記す。

表　和菓子をなりはひとして

五十年

寒紅梅に蕊をさす朝

令和六年歌会始入選歌　岩倉由枝

裏　（旧姓近藤　二ノ宮佐股）

高瀬高校　昭和45年3月卒業

丸亀市飯山町在住　如月菓子店

そのコピーの歌を眺めつつ思案した。「蕊」は、「ずい」だろうか「しべ」だろうか。「雄蕊」は、「おしべ又はゆうずい」と読む。「雌蕊」は、「めしべ又はしずい」と読む。短歌なら訓読みだろう、と結論した。ついでに寒紅梅を新明解国語辞典（三省堂）で引いた。「ウメの変種。花びらは八重で紅色、寒中に咲く」とあった。

続いて二枚目、昨年の暮れ、十二月二十五日（日）の四国新聞の切り抜きを読み始めた。この記事は確かに見たよと、上段横書きの要旨の文を読み終えて、下の本文を読み進むうち、「高瀬高一年の時の担任で、国語科教諭だった野口雅澄さんの影響で短歌を詠み始め、」に出合い、ここにちゃんと「高瀬高」と出ているではないか、要旨だけ読んで本文を読まなかったことを後悔した。今日、宮﨑さんにお会いしてなかったら岩倉さんが高瀬高校の卒業生であることを知らずに終わったかもと、「宮﨑さん、よく知らせてくれました」と彼に感謝しながら読み進めたのだった。

選考対象は一五二七〇首、その中から十首に選ばれたのだ。入選の知らせを受けた際には、家族はとっさに言葉が出ないほど驚いたという。家族が驚いた様子を想像するだけで、私まで幸せを満喫しているのだった。

続いて三・四枚目、野口雅澄先生から、高瀬高校の校長・同窓会長宛ての手紙を読んだ。

謹啓

この度の歌会始入選歌は貴校出身（旧姓近藤）由枝さんでありました。遅ればせながらお慶び申し上げます。昭和四十五年三月の卒業生で、私は一年時の担任にすぎませんが、当時級友の急死に際し、歌集を作り仏前に備えた思い出が歌作りの原点にあり、半世紀を超え花開いたように思われます。―以下略―

高校一年時の歌集作りが今回の入選として花開いたのだと知り、「この師ありてこの生徒あり」と、ここまで読んだ途端に、再び涙が止まらなくなってしまった。そして、ウィリアム・アーサー・ワード（一九二一～一九九四）が残した格言が脳裏に浮かんだ。

凡庸な教師はただしゃべる　良い教師は説明する
優れた教師はやってみせる　そして偉大な教師は生徒の心に火をつける

偉大な教師野口雅澄先生は、高校一年生の近藤さんの心に火をつけたのである。

五枚目、野口先生の資料。宮中歌会始（香川県大正～令和）入選歌に目を通す。

大正七（一九一八）年から今年まで、一〇六年間に七人が入選している。高瀬町では昭和八（一九三三）年の石井朝太郎先生（比地）以来、九十年目の快挙である。

昭和八年一月二十一日　御題「朝海」

動くとも見えぬ白帆の連なりて　朝しづかなり瀬戸の内海

歌碑が、観一三女の庭・琴弾山頂・爺神山腹・比地二公民館・多度津町桃陵公園にあるという。歌に疎い私は、恥ずかしながら未だにお目にかかれていない。

続いて、六枚目・一月二十日（土）の四国新聞の切り抜き（陛下国民との交流喜び皇居で歌会始、題は「和」、七枚目二ノ宮ニュース・令和六年二月一日第59号、発行二ノ宮クラブ）、八枚目、最後に、岩倉さんの宮中歌会始の記を読んだ。

宮中歌会始の記　　岩倉由枝

皇居松の間での緊張の中での歌会始の儀の後、連翠の間に移り、私達十人一人ひとりにお言葉がございました。あまりの緊張に身体がふらついてしまい、皇后様に手をさしのべていただきました。本当に身に余る光栄なことばかりで、どっと疲れました。

選者の先生との懇談もあり、私の歌の事もお話しいただきました。

〔和菓子屋をなりはひとして五十年　寒紅梅に蕊をさす朝〕

「毎日をきちんと生活している人の歌です。下の旬の冬の凜とした空気感と寒紅梅の赤のコントラストが良かった」と言っていただきました。本当に貴重な時間を過ごさせていただきました。（一月一九日）

二月十一日（日）、昼ご飯を食べながら、ふと思い付いた。今夜は寒紅梅を頂いて、久し振りに妻にお茶をたててもらおうと。

「おい、この後飯山の如月に行って寒紅梅を買って来てくれや。それで久し振りにお茶を点てて欲しいなあ」

丁重に妻にお願いした。昼から、たまねぎとそら豆の中の草抜きをしながら、「さて、寒紅梅はどんな和菓子だろうか」と想像するだけで、仕事の疲れは半減するのだった。当日、晩ご飯の後で頂いた寒紅梅、未だかつて味わったことの無い得も言われぬ格別の旨さであったことは言うまでもない。

（令和六年三月一日）